

塞ノ神式土器						
石坂式土器						
吉田式土器						
加栗山式土器						
前平式土器						
岩本式土器						
隆帯文土器						
	長身細形	短身広型	長身広型	穿孔型	鋸齒縁型	局部磨製石槍

第6図 磨製石鏃の形態と消長

長身太型や穿孔型などが認められるようになる。

磨製石鏃のなかで形態的に打製石鏃と異なるのは、早期前半の長身細型と短身広型であり、これらは弥生時代の磨製石鏃とも特徴的な形態的差異が認められる。

なお、磨製石鏃は縄文時代早期のみでなく、縄文時代後期～晩期においても計志加里遺跡など一部の遺跡で数は少ないものの製作されているが³⁾、それらの形態は打製石鏃とほぼ近似している。

5 製作技術

各遺跡で出土した磨製石鏃の未製品から製作技術を追ってみる。

使用されている石材は頁岩及び粘板岩であり、薄く偏平に割れやすい石材を利用している。荒田原遺跡出土の未製品は、石鏃の形に粗く折り取るような打ち欠きで整形したものに研磨が施されている。縁辺を研磨する直前のものと考えられる。

志風頭遺跡出土の未製品は、荒田原遺跡と同様に粗い剥離でだまかに整形したものに部分的に研磨が施されたものと、石鏃よりも幅広の偏平素材に研磨が施されたものが認められる。

一方、鷹爪野遺跡では多量の未製品が出土しているが、それらの中には浅い溝状の擦り切り痕が認められるものが複数出土しており、磨製石鏃の製作において擦り切り技法を使用していたという事実が判明した。

これらの未製品から、磨製石鏃は頁岩ないし粘板岩を利用し石材の目にそって割ることにより薄い板状の剥片をつくり、だまかな粗い割り取りにより整形し、その後全面を

研磨し、最後に縁辺を研磨する方法と、比較的幅広の素材を両面研磨し、擦り切り技法により石鏃の形を決定し、その後再び縁辺を研磨し、鋭い縁辺につくる方法の二つの方法が認められる。ただし、二つの方法は別々のものでなく、製作過程の前後過程である可能性も考えられる。

6 磨製石鏃製作の背景

筆者は前回の集成において、機能的展望については、当時出土数は少なかったものの、それらのなかで先端部分が欠損したものが多くことから、装飾品ではなく、実際に使用されるものであると考え、また出土点数が少ないことから、実用とは別の祭祀用の使用がある可能性を考慮する必要があると述べた。現在出土例が大幅に増加した結果、完全品は塚ノ越例1点と志風頭例2点と三角山例1点及び石ノ峯例2点のみであり、磨製石鏃の大部分が欠損した状態であることから、確実に使用されていることが補強された。そしてホケノ頭遺跡、鷹爪野遺跡、志風頭遺跡、荒田原遺跡などでは、磨製石鏃の数が打製石鏃より出土数が多いのである。このことは磨製石鏃も打製石鏃と同様に、通常の狩猟具として使用されていたと判断できる。

また、各遺跡は全て台地に立地しており海岸より遠く、大きな河川も近くに所在せず、また薄く製作されているが漁労用の銛ではなく、打製石鏃と同様に、動物を対象とした狩猟具として利用されたと考えられる。

では何故磨製石鏃が製作されたかについて検討してみよう。

磨製石鏃の出土遺跡分布は薩摩半島南部と大隅半島南部及び種子島などに集中している。これは石鏃製作に適した黒曜石の原産地から遠く離れた場所として考えることができる。つまり、出土する時期である岩本式土器や前平式土器の出土分布はほぼ県内全域であるのに対し、このなかで



第7図 黒曜石原産地と剥片石器の原産地